

## 令和2年7月 岩手県教育委員会臨時会 会議録

### 1 開催日時

開会 令和2年7月30日(木) 午後1時30分

閉会 令和2年7月30日(木) 午後2時50分

### 2 開催場所

サンセール盛岡 1階大ホール(盛岡市志家町1-10)

### 3 教育長及び出席委員

佐藤 博 教育長

小平 忠孝 委員

芳沢 莖子 委員

畠山 将樹 委員

新妻 二男 委員

宇部 容子 委員

### 4 説明等のため出席した職員

梅津教育次長

渡辺教育企画推進監、新田学校施設課長、山村参事兼教職員課総括課長、金野小中学校人事課長、高橋県立学校人事課長、木村学校調整課総括課長、軍司産業・復興教育課長、泉澤生徒指導課長、中川学校教育課総括課長、高橋特別支援教育課長、清川保健体育課総括課長、藤原生涯学習文化財課総括課長、岩渕文化財課長

教育企画室：菊池主任主査、長内主事(記録)

### 5 会議の概要

#### 第1 会期決定の件

本日一日と決定

#### 第2 事務報告1 県立高等学校生徒の自死事案に係る調査報告書の概要及び今後の対応について(教職員課)

別添事務報告により説明

畠山委員：再発防止のための「岩手モデル」策定委員会は、組織的にはどこに設置されるものなのでしょうか。

高橋県立学校人事課長：まだ構想の段階ですが、教育委員会全体で取り組まなければならないと考えております。ですので、教育委員会内のそれぞれの部署の担当者が一堂に会する形、さらには教育委員会外の方、例えば、部活動指導だけでなくスポーツ指導という観点からもこの問題は考えなければならないかと思っております。自死の問題も、学校だけではなく広い視野を持たなければならないと考えておりますので、そのような方もメンバーとして含めることも考えているところです。教育委員会だけでなく、部局を越えて1つの組織を作って対応するという方向性を検討しております。

畠山委員：調査結果は重く受け止め、再発防止について県教委が果たすべき役割について踏み込んで提言していただいている点は、よく検討していかなければならないと思っております。その点で、再発防止のための委員会は、実効性があるものになるよう一丸となって取り組まなければならないと思っております。

今回の件は、部活動の枠を超えてスポーツ指導のあり方として真剣に議論されなければならないと思っております。指導の面や保護者の関わりなどの面など、たくさん問題を抱えていると思っております。このような重大な事態が起きないように、スポーツに関わる全ての人が今回のことを我が事として捉えることが大事だと思います。県教委としては、他部局と連携して本県全体を動かす機会としていただきたいと強く思います。

新妻委員：当該校の生徒全員にアンケートを行い、回収率は3割弱だったようですが、学校の関わり方は

どのようなものだったのでしょうか。

また、当該生徒が、3年生の6月に学校生活アンケートに「安全でない場所がある」と回答したようですが、当時、学校として結果の精査、分析をどう行っていたのかを教えてください。

梅津教育次長：1点目の調査委員会によるアンケートでございますが、まず、事案が発生した直後に学校による調査、その後に県教委による調査が行われ、その後、第三者委員会が平成31年1月に設置されました。アンケートを実施した時期は、平成31年2月末から3月いっぱいにかけてです。第三者委員会の調査は、公正中立ということで、学校の先生方や県教委の職員が一切内容を見ないということ、調査委員会から生徒たちに書面で伝えていただいていた行いました。

学校が関わる場所は、調査委員会が生徒800人全てにアンケート用紙を郵送するのは事務的になかなか大変だということで、アンケート用紙を生徒に配布するということだけです。中身については学校も県教委も一切見ておりません。回答方法も、第三者委員会に直接郵送する形で行われたと聞いております。

2点目の学校によるアンケートですが、これはいじめに関することが主体となったアンケートでして、「いじめがあるか」とか、「いじめを見たことがあるか」などの質問項目の中のいくつか、「学校にはあなたにとって安全でないような場所がありますか」というような質問項目もあり、そこに、そういう面もあると記載されていることが、自死の後の学校の調査で分かったというものです。その部分について、具体的に学校で対応がなされていなかったということでございます。

新妻委員：次に今後、小委員会を作って検討していくことに関して意見を述べさせていただきます。

まず、(1)の自殺予防教育検討小委員会は、子供たちの悩み相談について、例えば高校ではカウンセラーの派遣があったりしますが、それだけに頼るのではない学校としての体制づくりが必要だと思います。教育相談室なども設けていると思うのですが、悩みを持った子どもたちが行っただけでなく、そういったことを聞いた子どもたちも駆け込めるような窓口を幅広く用意しておくことが大事だと思います。

それから、(3)体罰・暴言等防止マニュアル・ガイドライン検討小委員会に関して、報告書を読んでいると、A君以外の子どもたちは、ほとんどの表現が怒られたという表現になっており、顧問は指導しているという表現になって相当距離があるなど感じます。もっと具体的に言うと、バカ、アホ、使えねえとかですが、これはハラスメントの典型的な言葉の代表的なものですよね。今回はパワハラに等しいと思うのですが、ハラスメントも含めて少し広めに、委員会で検討いただきたいです。

(6)進路指導・キャリア教育検討小委員会や(7)部活動参加体制等検討小委員会について、報告書では、大学のスポーツ推薦について2年生時点でほぼ内定のように読めるんですね。推薦のあり方は、高校側だけで決められないですが、高校教育の3年間をどう考えてるんだということも含めてはっきりしないところがあるので、この辺りも切り込めるようなものとしていただきたい。それから、推薦入学に関わる顧問の役割が非常に大きいと感じまして、誰が決定権を持っているのかという辺りも含め、様々な課題があると思います。

さらに、部活動の参加体制の問題では、子どもたちの自主的な活動として、クラブというのは自治という意味ですから、生徒会活動との関係でそういった生徒の自主的な側面が生かせるのではないかなと思うのですが、生徒自治、生徒参加といった仕組み、あるいは生徒の声がすくい取れるような仕組みづくりもご検討いただければ大変ありがたいです。

山村参事兼教職員課総括課長：ありがとうございます。報告書の提言でも幅広く問題提起をいただいております。また、新妻委員からも、報告書に加えて幅広く検討をとのご意見をいただきましたので、そういったご意見も踏まえて検討させていただきたいと思っております。

小平委員：私自身の現職の頃の経験から申し上げますと、小・中・高の学校生活を通して言えることは、やっぱり家庭との連携が重要ということです。この顧問と家庭との連携はどうだったのか、どのような信頼関係があったのか、あるいはなかったのかという事に調査報告書は触れておらず、大切な根幹に関わる部分が欠けているのではないかと思います。そこが、起点にならなければいけないと思います。

現在の少子高齢化の中で、親は子に期待をするけど、子はその期待の中でつぶれていくということは何度も見てきました。私は、生徒が将来生きる力を本当に育むためには、どういう進路が一番大切なのかということをこれまで意識してきましたが、このような自死を二度と起こして欲しくないし、起こさないために我々は色々な手立てをしていくべきだと思います。

私は教育委員になって11年になりますが、皆さんよく頑張ってるし、幹部の方も一生懸命努力しているのを見ています。ただ、実際に何か事案が起こるたびに方針を学校現場に伝えたとしても、なかなかそれが末端まで浸透しないのも事実なんですね。これを末端まで浸透させるためにはどうしたらいいのかということは今後考えていく必要があると思いますので、これはぜひ検討をお願いしたいと思います。

それともう一つは、家庭ばかりじゃなくて地域の視点ですよ。おそらく、このような強いチームになれば、父母会とかがあるはず。父母会の役割あるいは意見なんか全然見えないですよ。

私の経験から言えるのは、このようなことは二度と起こしてはダメだということと同時に、このように悩む子どもたちに、生徒ファーストの気持ちで接するためにはどうしたらいいのかということ、計画や様々な提言に基づいて取り組んで行くことが肝要ではないかと思います。

もっとお聞きしたいこともたくさんあるんですけども、調査報告書全体を隅々まで見てから、さらに意見を申し上げたいと思いますので、可能であれば、調査報告書を概要版ではなく全部見せていただきたいので、お願いしたいと思います。

山村参事兼教職員課総括課長：報告書については、今回、時間の関係もあり概要版をお示しさせていただきました。全体版については個人情報等のこともあり、現在作業を行っている関係もありますけれども、今回は概要版ということでご理解いただければと思います。

高橋県立学校人事課長：ただ今のご提言について、特に進路指導のあたりや、あるいは職員の末端まで浸透させる方法などについては、今後の検討の中で考えて参りたいと考えております。

梅津教育次長：若干補足させていただきます。報告書の12ページの辺りだと思うんですけども、12ページは学校と家庭との連携の様子になります。通常、高校で進路指導というと、担任と生徒の間で面談や進路希望調査などを経ながら進めていきますが、その中で、家庭との連携が大事であり、特に進路指導については、本人を真ん中に置いて、学校、特に担任と家庭の連携が大事になります。

先ほど、新妻委員からもスポーツ推薦についてのお話をいただきましたが、一般的に入試は3年生になってからより具体的に動いていきますが、中には、正式に書類を出して大学入試となるのももちろん3年生からですが、合宿や大会などを見て、有力選手には様々なところから興味関心が寄せられるという実態はございます。担任が、専門的なスポーツに関係する進学について、すべてのノウハウを持ってはいない部分もあるので、部活顧問と担任がしっかりと連携をとって進めていくこととなります。部活顧問には、大学の情報を細かく提供してもらったり、同じスポーツでも色々な大学の違いなどを教えてもらえるということで、顧問の役割は重要であると思いますし、家庭との連携をとる上でも、部活の協力が必要だというような面もございます。

新妻委員：報告書を読ませていただくと、顧問の先生が暴力についての認識を述べているところや、校長先生が暴言について答えているところがあるんですけども、全体を通して、この案件だけではなく似たような案件の際に、厳しい指導だとか、指導の行き過ぎという表現がよく使われるんですけども、バカ、アホ、使えないとかそういった言葉一つとってみても、指導とは何も関係のない単なる暴言であってハラスメントだとか言いようがないことが多いと思います。

私も含めてですが、どうしても教育現場では、指導がちょっとね、という表現になってしまうんですけども、今後の課題として、指導とそうでないものの区別をきちっとしておかないと、どこまでが指導なのかの捉え方によって、別の角度から見れば典型的ハラスメントになってしまうので、教育に携わる者として、きちっと把握しておく必要があるのではないかと思いますので、ぜひ留意していただければと思います。

清川保健体育課総括課長：指導に関する区別のところですが、これまでも指導者の研修をたくさんやってきておりますが、現在は、スポーツの医科学を利用した適切な運動指導法と併せて、指導者のコミュニケーション、言葉がけのスキルを大変重要視してございます。今回問題となった言葉がけではなく、生徒をやる気にさせる、その気にさせる言葉がけが、スキルとして指導者にとって不可欠かと考えておりますので、生徒と指導者のコミュニケーション、どのような適切な指導ができるのかということ、しっかり研修で深めて参りたいと考えております。

芳沢委員：ここで示されたことは、私ども委員も真摯に受け止めなければいけないことだと思います。このような自死案件に際して、みんなで受けとめて進んできたつもりのことも忘れてしまったり、繰り返しになったりしがちだったなということも含めて、親としても非常に思うところがありました。

私は、スポーツ推薦を受けて大学進学する生徒は、誰もが喜々として行くものだという先入観があ

ったので、このように葛藤する生徒もいるんだなと思いました。ここまでではなくても、自己実現というか、本当はこれになりたかったのに進学のためにスポーツをするという、目的と手段がバラバラになるような生徒をこれまでも出してきたのかなと疑問に思ったりしているところです。

生徒のサインを同級生たちはきっと感じ取っていたはずなのに、相談窓口に行けなかったというのは、友達同士では分かっている先生にはなかなか言えないということだったのかなと思います。相談窓口については、入学時のオリエンテーションや入学後3か月や6か月のタイミングで説明する場が取れるのであればいいのかなと思います。例えばこんなことでも受けとめるよ、先生でだめなときは、社会の専門家につなぐこともできるよと説明する場があればいいのではと思ったところです。

それから報告書の最後のほうに、トップダウンではなくてボトムアップということが書かれていますが、これは本当にトップだけが理解してもどうなるというのではなく、むしろ現場の先生方に理解していただいて生徒指導につなげるためにも、時間もかかることだと思いますが、できるだけ短い時間で浸透を深めていって、先生方が県内どこへ行っても仕事に対する基本理念は同じものを持って対応できるという状態を目指すべきだなと思っています。

山村参事兼教職員課総括課長：調査委員会の問題意識として1つは部活動指導、もう1つは進路指導での問題があったということで、それに沿って提言もなされておりますので、非常に重要な問題と報告書でも整理されております。

今お話しがあったように、当該生徒さんがSOSは出していて、周りの人たちも気づいていたけれども、この事案を防ぐものにはつながらなかったということも、調査委員会は非常に大きな問題として捉えておられて、それに対する対策も検討しなさいという指示がございました。

様々なガイドラインなどは、流れとしては国から県教委、県教委から学校にという伝達はされていますけれども、それに基づいた活動が行われるところまでは至らず浸透してない現状については、小平委員からも御指摘があったところですが、教育委員会、学校、顧問の対応の問題として指摘されております。芳沢委員のご指摘も併せて、再発防止に向けた検討を進めていきたいと思っております。

宇部委員：これまでの取り組みについて、大変お疲れ様でございました。今回の件は、未来を担う若い子どもが命を絶ってしまったということで大変残念なことだったんですけども、「岩手モデル」の策定に向けて動いてくださるということで、先ほど芳沢委員からもありましたけれども、自殺予防教育にぜひ重点を置いて進めていただきたいと思っております。声をなかなか出せない子は日常もたくさんいるわけですけども、だからこそ地域も家庭も保護者も、そして教員も周りの大人たちも、岩手を担う大事な子供たちを一人ひとり、色々な目で見っていくということが大事だと思います。

この子にも、これからの人生がどのように動いていくのかという夢もあったと思います。視野が狭くならないように、伝える力とか、復興教育で「いきる」、「かかわる」といったことに取り組んでいるわけですので、新しく時間を取るのではなく復興教育とも関わらせながら、周りの子たちも見えぬふりをしないとか、思春期の時は難しいものですから、そういう時にはどのようにすればいいのかとか、そういうあたりが実際に現場で日常的に行われるように、今回設置する小委員会が動いていけばいいと感じているところです。

佐藤教育長：最後に私からも、発言をさせていただきたいと存じます。7月22日に調査委員会から調査報告書を受領いたしました。委員長ほか委員の皆様方に対して、1年6か月という長きにわたって調査をしていただきましたことに、私から御礼を申し上げたところです。

そのうち、ご両親、ご遺族の皆様には報告書の内容をご説明申し上げ、岩手県教育委員会を代表して謝罪をさせていただきましたことを報告いたします。

本日、臨時会を開催し、委員の皆さん方から質問やご意見等を頂戴いたしました。調査報告書の中の、再発防止に向けた「岩手モデル」の策定についてのご提言を踏まえまして、詳細についてはこれから検討を進めて参りますけれども、再発防止の「岩手モデル」策定委員会（仮称）の設置を早急に進めまして、現段階における8つの小委員会についてはさらに詳細を詰めて参りたいと思っておりますけれども、再発防止に向けた具体的な内容を検討させていただきたいと思っております。

これまで教育委員会が取り組んできた内容も含めまして、ゼロベースからの見直し、それから組織内のみならず多面的な意見交換と議論を行って、調査報告書の提言を踏まえた再発防止策「岩手モデル」を策定していきたいと考えております。検討状況につきましては、その都度、委員の皆様方にお示しをして、何度も何度もご意見を頂戴しながら、その内容の充実を図っていきたくて考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

会議結果の公表は、教育長に一任することとして議決された。